

大阪大学大学院准教授 安田洋祐氏に聞く (2)

安田洋祐 (やすだ ようすけ)
大阪大学大学院経済学研究科准教授
(聞き手：普及誌編集委員)

大阪大学大学院安田洋祐先生のインタビュー、第2回です。今回は日米の大学システムの違いについて、またマーケットデザインという研究テーマに出会われた経緯や、国内外の研究者の方々との共同研究についてお伺いしました。

目次

5. 日米の大学システムの違い
6. 研究テーマの決定
7. 共同研究について

最終回となる次回は、経営情報とゲーム理論のコラボレーションの可能性や今後の研究の展望についてお聞きします。

5. 日米の大学システムの違い

聞き手：分野的に、例えば企業とコラボしながら博士課程を過ごすということもあるのですか？

安田：それは、経済の場合はほとんどないですね。理系の研究室、特に実験などをやっている分野とはだいぶ違います。経済学部やビジネススクールに配分された予算を、学生たちに奨学金として直接

配る。教授が研究費の一部をリサーチアシスタントとして教え子に払う、という場合もあります。いずれにしても、企業と学生や研究室が直接繋がる、ということはまずありません。それに、実は経済や経営という分野は大学内では結構お金持ちなのですよ。

聞き手：企業から寄付金があるという意味ですか？

安田：はい。それもありますし、大学の中でも学生が集まる人気分野だから、という理由もあります。これは日本と海外とで随分違うところなのですが、日本の大学では入学の段階で何学部に行くというのはほとんど決まっているじゃないですか。多くの私立大学では入試の段階で決まっているし、国立大学などで入学後に選べる場合でも、ざっくりと定員などが決まってしまう。海外は全然違います。まず、入学後1~2年目に色々な分野の入門講義を受講します。それで、自分は何が好きだということ把握したうえで、進学する学部を決める。そうすると、学部間で学生の取り合いが生じます。それで学生が集まらない学部というのは予算が減らされる。結果的に教員の枠も減るし給与も減るという形で、本当にガチンコの競争が行われていて、その環境の中で経済学部や経営学科などはものすごく人気があります。やはり経済や経営を勉強すると、就職活動のときに有利だと思われるところがあって、学生も集まる。そうすると他の学部比べて教員の給与も高くなりますし、予算もしっかりつくから学生にお金を回しやすい、ということになります。大学内の学部間競争が本当に熾烈ですね。

聞き手：日本の大学のシステムと海外の大学のシステムのどちらがいいというのは実体験としてありますか？

安田：僕はたまたま専門分野が経済ですので、海外式に移行してもらった方が経済学部の先生の待遇



は改善するかな、と期待しています(笑)。一般に、文系学部の待遇は良くなるのではないのでしょうか。なぜかと言うと、設備投資にお金がかからないからです。教室があって、特に大教室さえあれば、言い方は悪いですがたくさん学生をさばける。理系で実験などをやる場合はこうはいかないですよ。つまり、大学経営をビジネスとして考えると、文系分野の方が圧倒的に割が良い。

ただ、全体のシステムとして僕は日本型の方が好きですね。アメリカのように学部間、教員間で思い切り給与や待遇に差をつけてしまうと、やはり余計な競争圧力も働いてしまう。横並びのところを急に変えようとすると反発を招くことは間違いないので、移行期において色々な形で犠牲を払うことになると思います。

聞き手：逆に、アメリカの理系というのは大丈夫なのですか。

安田：いや、給料は安いですよ。知人から聞いて驚いたのですが、理系の研究者というのは、ネイチャーやサイエンスなどトップジャーナルに何本も出しているような研究室で、しかもテニユアつきの准教授でも、給料が1,000万円に届いていなかったりする。かたや出版業績がゼロのビジネススクールの新任助教が2,000万円近くもらっていたりする。それが意味「競争」ということなのですが、さすがに行き過ぎではないか、理系研究者が気の毒ではないか、と同じ研究者としては心が痛みます。

聞き手：ニーズがあるから給料がいい。

安田：はい。さらに、経済やビジネス系の研究者は民間企業からの引き抜きも多く、それも教員の給料を引き上げている大きな要因です。日本が今後も技術立国の看板を掲げ続け、理工系の優秀な人材を育成していきたいのであれば、海外のシステムに移行せず、今の仕組みは変えない方が安全だと思います。

6. 研究テーマの決定

聞き手：先生はマーケットデザイン、特に学校選択制に着目してこれまで論文を書かれてこられました。どうしてそのテーマにいかれたのかという動機をお聞かせいただけますか？

安田：そうですね。学校選択制自体もそうなので

すが、もっと広くくりで、何でマーケットデザインと今日呼ばれる分野を専攻するに至ったのかをお話します。そもそも留学する時に、ゲーム理論をやること自体はあまり迷わずに選択に至ったのですが、実は僕の留学先のプリンストンには、マーケットデザインに近いような研究をやっている人はほとんどいませんでした。たしか、教員では誰もいなかった。それにもかかわらず何で自分の研究分野になったのかというと、博士課程の4年目に進学する時に、僕の指導教授であるパトリック・ボルトン先生が大学を移ったことがきっかけでした。日本でも教員が大学を移ることはあまり珍しくありませんが、アメリカでは日本以上に移籍が盛んで、ボルトン先生はコロンビア大学というニューヨークにある大学に移りました。その時に僕も1年間、客員大学院生という身分で彼についてコロンビアに滞在したのです。そのコロンビア大学で、マーケットデザインを研究している学者がいたのですね。

聞き手：では運命なのですね。

安田：そうなのです。実はマーケットデザイン、特に僕が主にやっているマッチング問題の研究というのは、なぜかトルコ人が非常に活躍している。コロンビア大学で出会った運命の学者というのが、そのグループを代表する一人のアッティラ・アブデュルカディオグル先生でした。彼がちょうどマーケットデザインの講義を大学院生向けに担当していたのです。その講義の中で、「こういう未解決の問題があるよ」とオープンクエスチョンが紹介されて、それを考えてみたのですね。一生懸命考えて、答えというか新しい研究の道筋を見つけた気がしたので、それをアブデュルカディオグル先生に相談しに行くと、「じゃあ続きを一緒にやってみようか」ということになった。それがマーケットデザインを研究し始めた直接のきっかけですね。その時のアイデアが、学校選択の問題と関連する新しい発見でした。だからまあ、元々何か興味があって学校選択問題やマッチング問題を分析していたのではなく、たまたま取った授業が後の大きい研究テーマに繋がっただけ。ビギナーズラックだったわけです。

聞き手：それは神取先生の時もそうでしょうし、何かこう導かれるような感じがあるのですね。

安田：いや～、ものすごく運が良かったとしか言えません(笑)。自分の経験を正当化するわけでは

ありませんが、こういったラッキーな面も含めて学生時代を振り返ると、最初から進路を決め打ちしすぎなくて良かったな、とは思います。近頃は真面目な子がとっても多いような気がします。大学に行く時も自分のやりたいことがまずあって、それをやるためにあの大学に行かなきゃいけない、常にやりたいことを見つけてそのためにこれをやらなきゃいけない、というようなマインドが少し強すぎる。もっといい加減でいいと思うのです。

18歳や19歳で自分の進路を決める、なんてことはほとんど無理なわけで、後からやりたいことが変わることはいくらでもあります。明確な目的や目標はないけど、とりあえず大学に入ってみました、で全然いいと思うのですが、それをよしとしない風潮がありますよね。

聞き手：風潮なのか、例えば我々もそうですけれども、外すことを嫌うというか、あまりにも情報があるので、その情報の中での最適な判断というのをよくやろうとします。

安田：なるほど。もちろん、やりたいことが決まっているときに、利用可能な情報があれば、それは最大限に活用すればいいでしょう。そのためにインターネットもあるし、今やスマートフォンで何でも手軽に調べられる。そういう簡単に手に入る情報があるのにそれを使わないというのは少しバカな話ですよ。自分がやりたいことが定まらない、つまり情報収集のとっかかりがないような状況に対して、少し焦りすぎじゃないか、という点が気になるのです。いざやることさえ決まれば、その後は情報面で活用できるものはたくさんあるので、そこから先というのはある意味早いはず、と思えばいいではないでしょうか。やりたいことを見つけ出すというか、面白いテーマが見つかるまで時間がかかるだけで、そこから先は早い。その分、テーマ探しにもっと時間を使ってもいいのではないかと思います。

聞き手：そうすると、研究テーマについては割と遅く選択したのか、それとも元々準備があっけと狭まった、どちらでしょうか？

安田：大きなテーマは早くから決まっています。経済学の場合は、博士論文のテーマというのはかなり広くて構いません。例えば僕の場合は、「ゲーム理論を使った応用研究」というざっくりしたテーマで取り組んでいました。そこから大きく外

れたトピックでなければ、きちんと博士論文として認められます。とにかく、トピックは多少雑多でも、目安としては3本、ある程度水準が高い論文を書いて、それらをまとめると博士号自体は出ます。さきほどコロンビア大学での滞在を通じてマーケットデザインに出会ったという話をさせて頂きましたが、それについて書いたのは博士論文の中の1本です。残りの2本は異なるトピックで書きました。

プリンストンの研究環境は、最初は素晴らしいと思いましたが、正直に言うと退屈な街でした。美しいキャンパスの中でゆったりと研究に打ち込みたい、と考えるシニアの教員にとっては理想郷なのでしょうが、若い大学院生にとっては辛い(笑)。息抜きの娯楽が、ダウンタウンにある小さい映画館とアイスクリームショップくらいしかないのですよ。

聞き手：逆に言うと学問に励めよという環境なのですね。

安田：はい。ただ5年となると長過ぎです。ニューヨークでの1年間は、研究だけでなく遊びの部分も充実していました。メリハリのある充実した学生生活を送ることができました。

聞き手：客員で行かれた後に、転籍ということは通常ないのですか？

安田：それはありません。合格、入学した大学で博士号を取るというのが大前提ですね。特に僕の場合は、日本でいうところの修士にあたる博士課程の前期もすでにプリンストン大学で終えてしまっていたので。

聞き手：もう1年早かったらもしかしたらということもあるかも。

安田：あったかもしれませんが。とは言え、他の大学への客員や転籍はリスクも大きいです。環境が変わって、うまくいく人もそうでない人もいますが、僕の場合それがたまたま、ものすごくまくいったのでしょね。プリンストン大学は世界でもトップレベルの教員や院生が集まる素晴らしい研究機関ですが、実際に行ってみて100%自分に合っているわけではないと感じました。4年目に1年間環境を変えることによって、すべてが良い方向に転がりました。

7. 共同研究について

聞き手：アブデュルカディオグル先生との共同研究は、ずっと続けられたのですか？

安田：はい、日本に帰ってからも続けました。もう1人コロンビア大学にいた韓国人のヨン・クー・チェ先生と3人の共同研究となり、2本論文を書いてどちらも無事に出版できました。今は同じメンバーで取り組んでいるプロジェクトはないですが、時々連絡しています。

聞き手：その後、青木昌彦先生などと一緒に研究をされています。

安田：青木先生には、僕が日本に帰った後、当時彼が立ち上げた仮想制度研究所という研究所で何か研究プロジェクトをやらせないか、とお声がけいただきました。その時に選んだトピックが学校選択制で、そこでの研究内容を活用してまとめた本も出すことができました。青木先生との出会いがなければ実現していなかったと思います。先生が数ヵ月前に亡くなられたのは本当に驚きでした。今でも信じられませんし、残念でなりません。いつお会いしても、ものすごく若々しくて、フットワークが軽くて、若い研究者とも交流を欠かさない、というか自分でそういった若手に声をかけて集めてくるのが上手でした。そういえば、留学時代からやっていたブログのコメント欄に、ある日「青木昌彦」という名前でコメントが付いたのですよ。まさか本人だとは思わないじゃないですか。

聞き手：同姓同名みたいな。

安田：イタズラかな、と思ったら実はご本人だった(笑)。メールでやりとりをさせていただいて、その後しばらく経って仮想制度研究所の話に繋がりました。その辺のフットワークの軽さはものすごく見習いたいです。青木先生は、我々若手研究者からすると、ものすごく偉い雲の上の存在なわけですが、わからないことを「これがわからないから教えてほしい」と素朴に聞ける。逆にこちらから



「最近こういうことが流行っています」と話すと、ものすごく楽しそうにされていました。

聞き手：敷居が低かったわけですね。実際にお会いして話してみると。

安田：自分自身が若手に接するときにはぜひ見習いたいです。青木先生もそうですが、どの分野でも、一流の方であればあるほど、若い人の話などを聞いて「そんなこと知っている」みたいなことは言わないですね。マイナス面を見るのではなく、一つでも自分の知らないことや、役に立つと思うことがあると、そのプラス面を評価するというマインドがすごく強い。

学校選択制との出会いも、青木先生との出会いも、自分で意図した行動の結果では全くありません。出会いに本当に感謝しています。

(次号に続く)

略歴

安田 洋祐 (やすだ ようすけ)

東京大学経済学部を卒業した後、プリンストン大学にてPh.D.取得(経済学)。政策研究大学院大学助教授を経て、大阪大学大学院経済学研究科准教授。著書に『改訂版 経済学で出る数学 高校数学からきちんと攻める』(共編著)(日本評論社、2013年)、『学校選択制のデザイン ゲーム理論アプローチ』(編著)(NTT出版、2010年)など。